

英領西インド・白人クリオールの「植民地責任」 — ジーン・リース (Jean Rhys : 1890-1979) と作品から —

堀内 真由美

社会科教育講座

Responsibility for Colonialism of White Creoles in the British West Indies —A Case of Jean Rhys and Her Works—

Mayumi HORIUCHI

Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

課題のありか：個々人の「植民地責任」

最近の東アジア諸国と日本との間の「緊張関係」を例に挙げるまでもなく、かつての支配—被支配関係は、たとえ「当該国家間で処理済み」という公式見解を双方が共有している場合でさえ、「国民感情」という個々人の認識のなかではそう簡単には「処理済み」にならないことを、私たちは知っている。

「国家間で処理済み」とされた中身は、支配—被支配関係の終焉の様態や、その後の国際関係の変化などによって様々である。しかし確かなことは、生命と文化あるいは生態系の毀損と破壊、新たに持ち込まれた「人種」や階層による分断など、植民地支配によってもたらされた結果が、現在も続く当該地での経済的・文化的混乱や紛争の原因とみられる例があまりにも多いということだ。今日へと引継がれた植民地支配の過去と、旧宗主国はどのように向き合うべきか。この問いへのヒントとなる有効な概念を、日本の歴史研究者たちが提起した。「植民地責任」という視座である¹⁾。本国とは異なる民族や言語や文化を持つ他国・他地域を植民地として、あるいは半植民地状態で支配した旧宗主国には、被支配国・地域の政治的独立が成ったあとも、「処理」の中身の違いを越えてなお「植民地責任」があるとする。

「日本は敗戦国だからいつまでも責任を問われ続ける」という趣旨の内容を語った地方政治家がいたが、彼の言はある意味では的を射ている。1000万人を超える人々をアフリカから拉致した大西洋奴隷貿易を端緒とする近代植民地主義の過去が、広範囲に植民地を領有した国々が第2次世界大戦の勝戦国だったために、現代史において正面から問われることがほとんどなかった。しかし、いまや、植民地主義の過去を敗戦国

と勝戦国の違いを越えて問うことも、「植民地責任」という新たな視点は可能にしてくれる。

一方で、国家による賠償や原状回復への補償という法的な責任とは別次元で、「国民感情」のもつれをほぐし、対話の成立をはかる努力もまた、「植民地責任」とは言えないだろうか。本稿では、さらに、そのような心情的な「植民地責任」が、かつて支配した側に属する個々人が担うべきものとしても存在する、という視点に立つ。そのうえで、植民地主義の過去を克服していくために、個々人が抱き、担いうる「植民地責任」を、どのように社会的に共有していくか。本稿が設定する課題はそこにある。

考察領域と対象：英領西インドとクリオール

筆者はこれまでに、両大戦間期イギリス帝国におけるフェミニズムが、同時代の帝国主義ときわめて親和性が高かったことを、白人自治領および英領アフリカ植民地を考察領域として明らかにしてきた²⁾。高い教育を受けた白人中産階級の女性たちが、フェミニズムの野心を、「文明化の使命」という、本国人が共有する帝国主義的イデオロギーに包み直し、圧倒的男性優位社会である本国を飛び出していった過程を示した。ただ、考察対象とした女性たちはほとんどが本国生まれであり、自治領や植民地を生涯の居場所としたものは確認できなかった。彼女たちにとって、帝国での活動は本国での栄達のためのステップであり、活動場所は「本国の庭先」だった。そのような人々から「植民地責任」をすくい取ることはできなかった。

他方、本稿で取り上げる英領西インド植民地には、17世紀から入植しはじめたイギリス系白人の子孫が存在し、圧倒的少数者であるかれらが、19世紀前半の奴

隷制廃止以降も植民地社会の支配層を形成していた。西インドと先祖の故郷である本国への「二重の帰属意識」をもっており³⁾、1度も訪れたことのない本国イギリスへの憧れや忠誠心と、生まれ故郷の西インド植民地の島への誇りや愛着を併せ持つのが、島にやって来る本国人たちと、かれらが異なる点だった。

植民地生まれのイギリス系白人らにとって、やがて興隆する脱植民地化運動は、生まれ故郷の喪失への過程でもあった。本国生まれの白人や植民地官僚などの短期滞在者に比べて、支配一被支配関係における植民地生まれの白人の立場は複雑である。故郷が故郷でなくなることで、しかしその故郷はもともと先祖が略奪し支配した場所。このような植民地にたいする一筋縄でいかない感情をひもとくことで、「植民地責任」の一端を明らかにすることはできないだろうか。

そこで本稿では、1920年代から30年代にかけての大戦間期に活発化する、英領西インド諸島植民地の自治要求運動に注目し、生まれ故郷の変化が、クリオール人の帰属意識にどのような影響を与えたのかを考察する。ところで、クリオールという語は複数の意味を持つ。肌の色の違いを越え、植民地の島々で生まれ育った人々をさすことが多いが、本稿では、英領西インド諸島における奴隷解放令が本国議会を通過する1833年以前に、島々に居住していたイギリス系白人の子孫を指す。今回の考察では、英領ドミニカ島出身である作家ジーン・リース (Jean Rhys, 1890-1979) を1つの事例として取り上げる。1966年刊行の代表作 *Wide Sargasso Sea* (『広い藻の海』、以下『藻の海』と記す) で知られる⁴⁾、リースの半生と作品を取り上げ、脱植民地化へと向かう故郷の動きが与えた影響を明らかにし、その意味について考えたい。その前に、クリオールをめぐる近年の議論とリースへの評価について概観しておく。

クリオールへの注目とリース評のこれまで

脱植民地化が進行する1950年代から独立完了の70年代にかけて、西インド植民地では、政治・経済的再編成と並行して文化的再編成の運動があった。この運動は必然的に、植民地生まれの白人を通して維持されてきた宗主国文化の否定を促した。独立が未完了ななか、アフリカ起源の文化の重要性を強調しなければならない時代に、本国系白人の「文化的貢献」を評価する必要は顧みられなかった。

独立後の西インドの文化的独自性を「クリオール性」に見出そうとするクリオール化論は、1980年代から盛んに論じられた。ここでのクリオールもしくはクレオールとは、奴隷貿易の被害者を先祖に持つアフロ・クリオールをさす。代表的書物『クレオール礼賛』は、ヨーロッパというフィルターを通してではなく、複数

のルーツを持つクリオールとしての精神で新しい自己表現を創造してゆこうとの宣言だ⁵⁾。一滴でもサハラ以南の血が入れば白人でないとする、ワン・ドロップ・ルールで序列化されてきた「人種」という虚構を、「混濁の価値」に転換させることで克服しようとする試みでもある。

西インドの文化的再編成の過程では、多様なルーツを持つ西インド生まれの人々の帰属意識や宗主国への感情を読み取る作業も行われ、文学の分野では、アフロ・クリオール作家の他に、奴隷制廃止以降の英領西インドに定着したインド系作家の作品も取り上げられている⁶⁾。しかし、本国系白人クリオール作家となると、きわめて数が限られる。リースも、クリオール化論で注目される存在である。ただしその「クリオール化論」とは、アフロ・クリオールたちが提起したハイブリッドなクリオール性を白人クリオールにも当てはめ、イギリス系ほか白人クリ奥ールの持つ多様性こそ、西インドの文化形成に不可欠な要素だとする、いわば「白人クリオール化論」である。その際リースは、植民地時代から独立運動に至るまでほとんど注目されてこなかった、白人クリオール女性の歴史を提示した功労者と称揚される⁷⁾。

このようなリース評に、非白人クリオール文化人たちが同意することは難しい。リースの『藻の海』に「白人女性と黒人女性の和解」を読み取ろうとするフェミニスト批評に対しては⁸⁾、両者間に友情や交流の歴史はなかったとの批判もある⁹⁾。また、脱植民地化の時代が被支配者たちにとって、本国の支配的文化に代わる「我々の文化」創造との新たな苦闘を意味したことを受け、「人種」が強力な経済的・社会的カテゴリーでなくなるまで、そこから目を離すことは不誠実だという認識がリース評には必要との意見もある¹⁰⁾。

1966年に刊行された『藻の海』は、19世紀英文学作品、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』(1847)を下敷きにしている。『藻の海』は2つの歴史時間から構成されており、これまでは「奴隷制と植民地支配」という時間が『藻の海』の考察対象になってきた。それが『ジェイン・エア』の歴史時間だからだ。しかし、本稿で明らかにするように、『藻の海』にはもう1つ、「脱植民地化へと向かう時間」が巧妙に組み込まれている。『ジェイン・エア』の奴隷制廃止直後の英領ジャマイカという枠組みを前提とする『藻の海』評では、奴隷制の過去と「奴隷主の子孫」であるリースの経歴を関連づけるかと思えば、一足飛びに、独立後の現状、「ポストコロニアルの世界」が語られてきた¹¹⁾。自治要求運動が活発化する1930年代という時代とリースの関係性が注目されない背景には、『ジェイン・エア』の枠組みを自明視する姿勢のほかに、本国の人々の、政治的独立にいたる熱帯植民地の自治要求の現代史に対する関心の低さがうかがえる。

『藻の海』から読み取れるリースの本国や日本人への心情を考察し、作中に挿入された自身の「脱植民地化体験」とその衝撃を、読み解いていこう。

『ジェイン・エア』と『広い藻の海』：本国への復讐

1847年刊行の『ジェイン・エア』は¹²⁾、住み込み家庭教師「ガヴァネス」のジェインと、イングランド、ソーンフィールドの地主でジェインの雇い主であるロチェスターの恋愛が成就するまでを描く。2人の前途を阻む障壁として登場するのが、15年前ジャマイカで結婚したロチェスターの妻で、いまはソーンフィールド屋敷の屋根裏部屋に監禁されている「狂人バーサ」の存在だった。しかしバーサが屋敷に火を放ち、命を絶つことで、その後2人は晴れて結ばれる。

物語の後半で、隠していた「狂妻」の存在が知られてしまったロチェスターがジェインに過去を告白する¹³⁾。結婚の目的は、次男であったロチェスターが、莫大な遺産を相続したジャマイカのクリオール娘を得ることだった。結婚はしたが「すこしも彼女を愛さなかった」と言い、「忌まわしい母親の血を引いた」「大酒のみの淫蕩な妻」に苦しめられたと訴える。母親同様、やがて妻も発狂し絶望していると、「ヨーロッパから吹く希望の風」が、狂妻を連れ帰り監禁し「気に入らぬ新しい縁を結ぶ」ようにと勧めたので、それに従ったとロチェスターは説明する。

熱帯の狂気、酒浸りの白人など、19世紀前半の本国イギリスから西インド植民地へのまなざしが、『ジェイン・エア』にも投影されている。例えば1801年から5年間、総督の妻としてジャマイカに赴任したマライア・ニュージェントの日記には、目に映った白人プランター（大農園主）一家の旺盛な飲食行為や大勢の黒人使用人に囲まれた生活が記されている¹⁴⁾。ニュージェント日記を、ブロンテが実際に目にしたのかはわからない。しかし、18世紀末から、本国政府が、奴隷貿易や奴隷制廃止に反対する西インド植民地議会の強硬派プランター層を、「凶悪な専制政治を支える近視眼的な人々」と非難していたのは確かである¹⁵⁾。同時代人であるブロンテが、新聞報道やニュージェント日記のような植民地体験記をとおして、「西インドの白人」に否定的なイメージを抱いていても不思議ではない。

一方、リースは、『藻の海』の原型にあたる『幽霊』と題された小説を1939年にいったん完成させていた。直後、原稿を燃やしてしまうが、2章分を後年「発見する」。もう1つの『藻の海』は『カリブ人居住区での結婚式』という作品だったが、その原稿は「見つからなかった」。『藻の海』仕上げ段階で、編集者への手紙に、リースは30年におよぶ紆余曲折をこう明かし

ている¹⁶⁾。また64年の手紙には、昔から『ジェイン・エア』を読む度に「こけおどしの狂人の描き方、クリオールに関する誤った場面、ロチェスターの冷酷さに苛立った」と書く¹⁷⁾。「既婚女性財産法」がない西インドで、若いクリオール女性は「寛大なるイングランドにいったん行ってしまえば行方知れずとなり伝説化していく」と作品の時代を説明し、「もしシャーロット・ブロンテがこのような伝説からバーサを抽出したのなら、私には行方知れずになったバーサを取り戻す権利がある」と執筆動機を綴る¹⁸⁾。

リースは、ジャマイカでの少女時代のバーサを主人公にして、彼女が「狂気」に至るまでを『藻の海』に描いた。主人公アントワネット・バーサ・コズウェイはクリオールの母と本国出身でプランターの父を持つ。アントワネットは奴隷制廃止後の島で弟と育つが、父亡き後、元奴隷主の家族として、没落白人として、憎悪と軽蔑の視線に晒されながら暮らす。数年後母は再婚するが黒人たちからの報復を恐れていた。元奴隷たちによって屋敷を焼かれ弟が亡くなると、母は精神のバランスを失っていく。やがて義父も亡くなり、その直後、ロチェスター家の次男坊が、自分を軽んじる父と長兄を恨みながらイングランドからやって来る。多額の遺産相続人で世間知らずのクリオール娘アントワネットに求婚するためである。

当初は西インドの環境と美しい妻にエキゾチックな魅力を感じたロチェスターだが、アントワネットの奴隷主だった亡父が残した「肌の色のちがう親族」による告げ口や脅迫めいた金品の要求を受けるうち、だいに不信感と嫌悪感を抱くようになる。夫の変化を感じ取ったアントワネットは、関心を再び自分に振り向かせようと、元女中頭に媚薬の調合を依頼する。だがその秘策は、夫が寝室の隣で混血の女中と関係を持つという結果を招く。

この場面でアントワネットは、「黒人がお気に入りなのだと思っていただけ、薄茶色の肌がお好みだったとはね」と言い、奴隷制の上に富を築いた西インドのプランター層に批判的だった夫に「あなたの行為はかれらとどこが違うの」と問い詰める。夫はただ「奴隷制とは好き嫌いの問題でなく正義の問題だ」と返答するのが精いっぱいだった¹⁹⁾。夫の「婚外交渉」は『藻の海』の創作ではない。『ジェイン・エア』のなかの彼もまた、フランスで高級娼婦を囲った経験を持つ。自分の愚行をジェインに告白する際、ロチェスターは「情婦を囲うこと」が「奴隷を買うことに次ぐ悪習」だとし、その理由を「情婦と奴隷」という「天性劣等なもの」と親しく暮らすことは「こちらが墮落していく」ことになるからだと説明する²⁰⁾。リースはここを見過ごさなかったのだろう。奴隷主を批判する一方で「天性劣等なもの」には支配される理由があると看做す、日本人の差別意識や浅薄な「正義」をリースは『藻の海』

で再現してみせた。

『藻の海』のロチェスターは、西インドの社会、文化、気候への嫌悪をアントワネットにぶつけるようになり、他方、西インドでの後ろ盾を失ったアントワネットは、心を閉ざし夢と現実の狭間へと入っていく。物語は、『ジェイン・エア』で描かれた屋根裏部屋の「狂人バーサ」に戻ってくる。終末へと向かうアントワネットは「イングランドに来る途中で迷子になってしまった」と現状認識しており、自分の帰属がどこにあるのかも、もはやわからない。この「帰属先の喪失」こそ、リースが生涯、周囲や夫にさえ漏らさなかった、故郷の脱植民地化に直面した際の衝撃を解明する重要なカギである。

ともあれ、ロチェスターに、浅薄な正義感や冷酷なイギリス紳士という側面を描き足し、バーサ（アントワネット）の狂気の原因を示すことで、本国人への復讐とクリオールの名誉回復は実行された。そこにはリースの家族史と自身の本国体験が刻印されている。

家族史と「二等市民」としての本国体験

『藻の海』には、先祖が関わった「奴隷制の過去」だけでなく、自身が目の当たりにした「脱植民地へと向かう現在」に対するリースの回答が隠されている。まず、『藻の海』の「奴隷制と植民地支配」という時間に投影された、リースの家族史と自身の本国体験を見ておこう。

ドミニカ島は、カリブ海小アンティル諸島のほぼ中央部に位置する小島である²¹⁾。島の領有は七年戦争(1756-63)で一応の決着がつくまで英仏間で揺れ動いた。そのさなか白人入植者が1691年に開拓したのが後にジュネーヴ農園と呼ばれる地所である。最大規模1550エーカーで島第2位の広さを誇った農園の管理人として、18世紀末スコットランドからやって来たのがジェームズ・ロックハート、リース母方の曾祖父である。彼は1824年にジュネーヴ農園を買い取り、258人もの奴隷を所有するプランター（大農園主）となる。プランターの「行ない」の例にもれず、多くの「肌の色の異なる」婚外子を残した²²⁾。

奴隷制廃止から3年後にジェームズが亡くなり、さらに1844年、奴隷制が復活すると噂が広まり各地で暴動が頻発すると、ジュネーヴ農園も襲撃目標となり、同年農園と屋敷は元奴隷たちに焼き討ちにされる。その後ジェームズの子どもたちが屋敷の再建と農園維持に奮闘した。81年、1人の若者がウェールズからやって来る。農園に近接する地域に医務官として赴任してきたウィリアム・リース・ウィリアムズは、長兄を優先する父との折り合いが悪く故郷を出た。赴任まもなく熱病にかかった彼を農園の双子姉妹が看病する。ウィリアムは翌年、双子の1人ミンナ・ロックハー

トと結婚する。ジーン・リース、本名エラ・グェンドレン・リース・ウィリアムズは1890年8月24日、首都ロゾーで夫妻の次女として生まれた。

12歳のとき、黒人信徒たちが、カトリック教会を批判した記者宅を取り囲む様子を間近に感じたリースは、「黒人への警戒心のようなものが心に忍び込んだ」と振り返る。この体験と、1844年にジュネーヴ農園が焼かれた事件が、『藻の海』の焼き討ち場面のモチーフだとされてきた²³⁾。しかし後述のように「焼き討ち事件」はもう1つある。その事件までの間にリースは苦しい本国体験をする。

リースは1907年8月故郷を離れケンブリッジの名門パース女学校に編入する。しかし、この名門女学校で居場所を見つけることはできなかった。優秀な「ケンブリッジ・ウーマン」の女教師たちが主導する厳しい授業や学寮生活は、ゆったりしたドミニカでの女学校生活に慣れたリースには苦痛でしかなく、それが理解できない女教師たちに心を開けなかった。さらに本国の白人富裕層出身の同級生からは、「おかしな英語」だからかわれたり、リースも知らない「黒んぼの歌」の歌詞を故意に尋ねられたりした。

進学を断念し女優を志願したリースは、俳優養成学校に合格するが半年で辞めている。「自叙伝」では父の急死で退学したことになっているが²⁴⁾、本当の原因は「英語」だった。当時の俳優たちに求められた「キングズ・イングリッシュ」は、幼い頃から「なまりがきつくて黒人のようだ」といわれたリースの英語に矯正を迫った。本国の富裕層出身の同期生には無理のない英語も、彼女にとっては「自分を偽らせるよう圧力を加える壁」だった。矯正に努めたが、学校は改善の見込みは薄いと判断し故郷の父に見解を送った。

「養成学校での失敗を親族全員が知る故郷」に戻りたくなかったリースは、コーラスガールに転じる。20歳のとき、上流階級出身で「イートン・ケンブリッジ」卒の40歳の男性と恋に落ちる。彼は、コーラスガールにしては教養と品があり、西インドの話をしてくれるリースに惹かれるが、身分違いを理由に結婚できないことを告げる。リースはコーラスガール仲間を寄せ、売春をするうち妊娠に気づく。危険な中絶手術を受けた後は、元恋人から「事務的な厚意」としての援助を受け続けたほか、ギャンブルに誘った男性から金を巻き上げるなど、「性と金とのこそこそした交換」によって生きていく。

1917年、オランダ人ジャーナリストからの求婚が転機となる。滞英期間を超過していた彼は求婚するとすぐロンドンを発ってしまう。それでも、欧州を活動拠点とする婚約者との将来が、本国と絶縁する格好の理由になることがリースにすべてを決断させた。婚約者の身辺に不安があると警告する元恋人に心配は無用と言い残し、19年初頭、本国と決別する。

家族史からよみがえる「奴隷制の記憶」と「二等市民」として冷遇を受けた本国経験は、『藻の海』をとおして、本国人の西インドとクリオールへの関心を喚起する役割を果たした。最終局面でアントワネットの自己認識の動揺が描かれながらも、アントワネットは西インド人としてのプライドを持って、本国人の夫と対峙している。実際に、『藻の海』に取りかかったとされる1930年代半ばまでのリースは、西インド人としての自己認識を全面に押し出す作品を発表していた。36年の帰郷以前のリースの自己認識を確認しておく。

止まったままの「ドミニカ時間」と西インド人のプライド

第1次世界大戦後まもなく本国を去り、オランダで結婚後つかの間の安定を得たリースだが、第1子を亡くし夫が逮捕されるなど不幸が襲う。ヨーロッパ各地を転々とするなか、偶然に、かつて中絶手術後に苦しい日々を綴った日記が著名な編集者の手に渡ったことで、リースは作家として再起を賭け1927年本国に戻る。ロンドンの出版代理人と再婚したリースは、この後およそ10年間順調に仕事をこなすが、相変わらずイギリスは心開ける場ではなかった。

若き日の日記に脚色を施こした中編とその他の短編を含む、27年出版の著作第1号、*The Left Bank and Other Stories* (以下、『左岸』と記す)のなかに²⁵⁾、もっとも初期の故郷関連作品が収められている。‘Again the Antilles’ (「アンティル諸島再び」以下、「アンティル再び」と記す)である²⁶⁾。『左岸』発売年から、作品はヨーロッパ時代に書かれたと見られる。

話はドミニカ地元紙の「カラード」の編集者と、島の白人プランターとの間で交わされた紙上論争である。編集者は、島での残忍な専制君主的行動に加担しているとして、プランターを「シェークスピアの筆によるモントローズ侯爵の言にあるような、真の品格ある理想からいかにかけ離れていることだろう」と批判した。プランターは編集者の引用文をとらえて、「あれはシェークスピアではなくチョーサーによるものだ」と訂正し、「無知な異人種に偉大な英国人の名を口にされるほど悲しく憂鬱なことはない」と応酬する。これに対し編集者は、「専制的行為や虐待に品位を落とす英国紳士の振る舞いは、品格ある者と表現されるはずもない。名言の出所がシェークスピアかチョーサーか、そんなことに私は何の重要性も見出すことができない」と「威厳をたたえた文章」を書き、語り手の「私」は深い感銘を受ける。

プランターは20年前に本国からやってきた白人で、一方の編集者は、その職業から、限りなく白人に近い混血だったと推測できる。「カラード」は歴史的に植民地生まれである。語り手の「私」は、「イギリス文

化」を誇示する本国生まれの白人プランターより、「カラード」であってもアンティル諸島生まれの編集者に肩入れしている。「私」にとって、「イギリス文化の権威」を物ともしない「反逆者」は頼もしい西インド人である。編集者を通して称揚された西インド人の矜持は、その後、リースの「西インド人宣言」となって1つの長編に結実する。

本国復帰後初の長編である1934年刊行の *Voyage in the Dark* (『暗闇の中の航海』、以下『航海』と記す)には、主人公アンナのコーラスガール稼業や中絶手術の経験など、リースの本国での経験が投影されている。作中、アンナが「紳士の恋人」に自分の家系を明かす場面がある。「イギリスとイギリス人が嫌い」と公言するアンナは、亡き母方の所有する広大な農園、幼い頃見た奴隷名簿などを解説した後、「私は母方から数えて5代目の正真正銘の西インド人だ」と宣言する²⁷⁾。

一方、義母は、「白人の姿を見ないような場所」で育ち「黒人女中と判別がつかないようなしゃべり方をしていた」アンナを本国に連れ帰り、「ニガーではなくレディにしよう」と努力したが不成功だったと語る²⁸⁾。『ジェイン・エア』に見た19世紀本国白人の熱帯植民地人に対する偏見と差別感情は、20世紀に入っても弱まることはなかった。熱帯の風土、社会環境の差異などから、植民地に「あまりにも長く」滞在する入植者は「原住民」のようになるという「退化への恐怖」が、当の植民地人よりむしろ本国の白人たちにとり憑いていた²⁹⁾。はじめて本国にやって来た17歳の自分から自信と希望を失わせた「イギリス性」を、リースは作中の義母に体現させる。「5代目」だと主人公アンナに宣言させることで、「西インド性」をその対抗軸として打ち出すのだ。

「アンティル再び」の編集者への称揚と、『航海』のアンナの西インド人宣言の背景には、17歳で離島した故郷がそのままの姿でしまいこまれている。リースの記憶のなかで止まったままのドミニカ時間がそこにはある。17歳までのドミニカは、リースにプライドを持たせるに足る、「繁栄の時間」のなかにあった。

1833年の奴隷制廃止以降、英領西インドのなかでもドミニカではきわだってムラートと呼ばれる混血人勢力が強く、農園管理人、中小貿易商、軍人として存在感を強め、経済力を背景に植民地議会にも進出していった。しかし、かれらの勢力拡大は、白人保守層と本国の干渉によって、1865年3月、ドミニカが直轄植民地となることで阻止される³⁰⁾。さらに71年には「リーワード諸島連合」に組み込まれ、ドミニカ行政トップである弁務官は英領アンティグア総督から任命されるという、支配の二重構造に置かれた。

新体制は多くの政治的・経済的混乱と非効率をもたらした。度重なる暴動とインフラ整備の遅れを無視できなくなった本国政府は、調査官を現地に派遣し実状

を報告させた結果、1895年、ドミニカ植民地に行政長官のポストを新設して行政トップの権限を引き上げた。ドミニカで開発が推進されるのは、その直後からである。1890年生まれのリースの「ドミニカ時間」は、混乱收拾のために本国から投入された莫大な助成金によって、島の基盤施設が整えられていく時期と重なる。とくに1899年に着任したヘスキス・ベル行政長官の下で開発は飛躍的に進む。島の内部を走る主要道路の整備、電話線の敷設と郵便事業の開始、公共図書館建設などの大事業が1905年頃までに次々と着手、完成する³¹⁾。首都ロゾーに暮らすリースは、最新のサーヴィスを享受し建造ラッシュを目にしたはずだ。

本国での不遇は、幸福を求めたヨーロッパでの生活によっても補填されなかった。絶縁した本国に、生活のため舞い戻らざるを得なかったリースにとって、恵まれた境遇にあった少女期のドミニカと西インド人というプライドが、相変わらず冷淡な本国で、「イギリス文化の権威」を物ともせず暮らすための盾となっていたことは間違いない。しかしリースの「ドミニカ時間」に、この後まもなく一気にその針を進める事態が待つ。1936年2月から6月の夫を伴っての帰郷である。リース46歳になる年のことだった。

「すべてが変わってしまった」故郷

リースは、ドミニカ帰郷後すぐ友人へ手紙を書いている³²⁾。滞在中にリース夫妻は、近隣村の白人女性たちから食事に招かれる。そのうちの1人で手紙に「レディ」と記された女性は、エルマ・ネイピアを指す。ドミニカ現代史に登場するネイピアは、スコットランドに生まれ、夫との旅の果てに32年ドミニカ島に定住し、後に島の政治に関与する³³⁾。同世代であるリースとの面会は、ネイピアが執筆した小説が出版を断られた直後だった。ネイピアは、リースの夫が出版代理業をしていることを知っていた。「だから彼女は急いで我々を招待しなくてはならなかった」とリースは皮肉を手紙に綴っている。

リースは、ネイピアだけでなく、サマセット・モームをはじめ何人もの作家がこの海域を訪れ作品にしていることに言及し、「西インドを愛してやまない私には、愛もなく、20年も暮らさずして、あるいは、ここに生まれもしないのに、当地のすばらしさを描ける人間がいることが信じがたい」と手紙に書く。そこには、訪問者や本国から来た「新参者」に対する、クリオールとしての対抗心がのぞいていた。

ところが40年余の後、1978年秋に行われた最晩年のインタビューのなかで、36年の帰郷で見た西インドは「すべてが変わってしまっていた」と語り、「子どもの頃の西インドを思い出すのはとても難しい」と嘆く³⁴⁾。そして「自叙伝には子どもの頃の西インドを描きたい」

と繰り返す言う。自叙伝とは、リースの死によって未完のまま刊行された*Smile Please* (1979、以下「自叙伝」と記す)である。インタビューでの発言にもかかわらず、「変わってしまった」故郷の衝撃は漏らさずにいられなかったようだ。「自叙伝」で子どもの頃のジュネーヴ農園を詳述した後、帰郷時にも農園を訪問したことに触れている。ガイドに案内されたその場所は、「がらんとした更地だった」。「一生懸命に見つめた」が「何もなかった」。「屋敷の土台石までなくなっていた」³⁵⁾。その理由はドミニカ現代史が語る。

4年以上にわたる大戦が財政を逼迫させ、1920年イギリス本国が深刻な経済不況に陥ったことで、植民地も本国経済の影響を受ける。しかし宗主国の衰えは、同時に、自治を求める人々を活気づけることにもなった。20年代から30年代にかけて、英領西インド植民地は再び政治的混乱の時代を迎えた。ドミニカでは、19世紀後半の直轄植民地化によって勢力を抑えられていたムラートら中産階級が、公選議員による植民地議会の復活を強く要求するようになる。1925年には要求の一部が実現し4人の公選議員が誕生した。かれらを中心にさまざまな組織が立ち上がり、27年以降、直轄植民地廃止を求める政治運動は島全域に広がる。

この動きを重く見たドミニカ植民地政府は、議会定員の増員による少数派の排除を狙う。30年、新たに任命議員に推挙されたうちの1人が、ジュネーヴ農園当主だったノーマン・ロックハートである。家系をたどるとノーマンはリースの母の弟つまり叔父にあたる人物だとわかる³⁶⁾。彼が議員任命を受諾してまもなく、農園と屋敷は放火され全焼した。事件についての情報提供者には250ポンドの報奨金を出すと、行政府は犯人探しにやっきになったものの、結局誰の仕業かはわからなかった³⁷⁾。植民地の自治を求める地方政治のリーダーやその支持者たちから、ノーマンが改革を阻む守旧派だと目され、敵視されたことは間違いない。

リース帰郷の36年には、ドミニカに新しい立法議会が発足し、公選議員が議会の半数を占めるよう改革された。さらに4年後には、エルマ・ネイピアが初の女性議員に選出される。故郷は、ロックハート家ほか数家族のプランターを含む旧支配層が、ムラートや「新参者の白人」ら新勢力に取って代われようとしていた。帰郷でリースは、本国と本国人に対抗するための「盾」を失った。そして、奴隷制の「過去」からだけでなく、故郷の「現在」からも受け入れられない存在となったことを悟るのである。

喪失と嫉妬とのほざまで：動揺する西インド人

帰郷は、喪失感と同時に、「存在しているが変えられてしまったもの」への不満や嫉妬のような感情をリー

スに抱かせた。

例えば「自叙伝」で語られる図書館の変化だ³⁸⁾。カーネギー図書館は、昔、人ごみが苦手な少女リースが「幸福な気分になれる」場所だった。「後年、帰郷をした際に立ち寄った」図書館は、「混雑して、貸し出し台には長蛇の列ができて」いた。「貸し出し台で本を差し出す手がすべて黒人のものであるという光景」を、はじめは「感動的だと思った」。しかし「私もよく知る司書が疲れていることに気づく」。本にスタンプを押しては返すが、「利用者の誰も彼女を見ず、誰も彼女に礼を言わなかった」。作業中、司書の疲労が強まるように思えた。「立派な図書館」と「教養の象徴である書物」が黒人市民に開放されたことを現実として認めながらも、かれらが司書の存在や図書館の価値を理解しているのかを、リースは疑いたくなったようだ。

図書室を扱った作品もある。1960年7月に雑誌 *London Magazine* に掲載された短編 'The Day They Burned the Books'（「かれらが本を焼く日」、以下「本を焼く日」と記す）である³⁹⁾。登場人物はソーヤー夫妻と息子エディ、語り手の「私」である⁴⁰⁾。ソーヤーは本国から来た白人でカリブ海のすべてが嫌いだと公言している。夫人は教養があり美しい。ソーヤーは人前で妻を「黒んぼ」と呼び暴力をふるった。夫人は夫に抗することなく、「英国流の冗談だと思おうとするかのように」微笑みだけだった。夫の自慢は庭に増設した図書室で、ロイヤル・メールが汽船で着くたび増える蔵書は、いつしか書棚を埋め尽くした。しかし「私」は夫人が図書室を嫌っていることを知っていた。

息子エディは、「明らかに父親譲り」の容貌をしていたが、筋金入りの「本国嫌い」だった。本国に行ったこともない人々がロンドンを興奮気味に語る際の彼の反抗ぶりには、周囲も驚くほどだった。「私」が12歳の頃ソーヤーが急死すると、しばらくして夫人は図書室の本を処分し始めた。焼却されようとする本をエディは母から奪い取り「私」を連れて飛び出す。このことを夫人が「私」の母に告げ口するかもしれないとエディは心配する。「母はあんたのお母さんのことなんて気にしないから大丈夫」と言った「私」に、「うちの母が白人でないからか」と彼は聞き返す。「私」は「そういうことが話題になると父がいつも苛立って言う台詞」を真似てみる。「誰がいったい白人だっていうの。そんな人間、ほとんどいないよ」、エディにそう言った途端、「黙れ、母はおまえの母さんなんかよりずっと綺麗だ」と言い返される。「ほんとうにそうだね」、すぐに「私」も「心からそう言った」。

「父の台詞」は、「人種偏見はなかった」というリースの父も口にしていたのだろう⁴¹⁾。19世紀末から新たに誘致した本国系入植者も1920年を過ぎると激減し、白人といえば、ロックハート家ほか古くからのプランター数家族と、ごく少数の「新参者」だった⁴²⁾。白人

は「ほとんどいない」という「私の父」の見解は正しかったが、植民地の現実はまだ別にあった。リースも述懐するように、白人クリオールたちは、一見しただけで、よそ者には感知できないほどの微妙な肌の色合いがわかるように訓練されていた⁴³⁾。1滴でも非白人の血が入っているため「私」とは同じでない、そのような植民地社会をエディは生きていた。

そして「私」も、「父の台詞」がエディには欺瞞にしか聞こえないことを知っている。知人への1953年の手紙に、この作品の草稿完成を知らせ、「カラー・バーの厳しかった時代の故郷の話」だと説明している⁴⁴⁾。「人種の話」が避けられないことを理解していたリースの西インド認識は、「純粋な白人」の存在を否定することで問題を解決しようとする、本国から来た「父」のような人間ほどには単純でなかった。

他方で、同作品には、27年の「アンティル再び」とは、「イギリス文化」への姿勢をめぐって対照的な描き方がされている。ソーヤーの図書室は「自叙伝」での図書館と同様、イギリス白人の教養の象徴であり、本国から取り寄せられた蔵書は「イギリス文化」そのものである。本を焼こうとする「カラード」の夫人は、「アンティル再び」の中なら「カラード」編集者と同様、「イギリス文化への反逆者」だ。ところが、「本を焼く日」の語り手「私」は、「アンティル再び」の「私」がしたような、「イギリス文化の権威」を物ともしない「頼もしい西インド人」として、夫人を称揚することはない。差別的な本国人の夫への復讐に蔵書を焼く夫人は、「イギリス文化の価値を理解しない非白人」として、「本国嫌い」のはずだった息子エディと対置させられる。そして「私」もエディに共感している。

イギリス文化を否定する「カラード」に、自分と同じ西インド人の気概を感じていたリースは、もういなかった。とはいえリースも、「イギリス文化」から否定され続けた「二等市民」だった。本国にも故郷にも帰属を求められないリースの自己認識の動揺は、最後の長編『藻の海』にいつそう鮮烈に映し出される。

組み込まれた故郷の現在と「迷子のクリオール」

『ジェイン・エア』のバーサを描く以上、『藻の海』は19世紀英領ジャマイカを背景にする必要があった。だが、はじめから「ジャマイカのアントワネット」を描くつもりはなかったようだ。

『藻の海』第1部の舞台は奴隷解放直後のジャマイカである。奴隷主の父亡き後、クルプリという広大な所領と屋敷が解放奴隷たちに焼き討ちにされる。クルプリ所領について、リースは1964年編集者への手紙に、「私の父が購入した小さな所領で肥沃な土地だった」と説明している⁴⁵⁾。しかし実際に父が購入したのはドミニカ島のボナ・ヴィスタと呼ばれた土地で、「クリブ

リ」はジュネーヴ農園と屋敷であったことが歴史家によって明らかにされている⁴⁶⁾。作品には自分史を投影していたものの、死の間際、「自叙伝」に奴隷主の子孫だと記すまで、リースは本国の人々に奴隷制と自分の先祖とのかかわりを明かさなかった。

ジャマイカに行ったことのないリースが、かの地の歴史を描けないことは当然だ。『ジェイン・エア』の背景にいかにも自然にドミニカを挿入するかが課題だっただろう。『藻の海』第2部の冒頭にその苦労の跡が見て取れる。ロチェスターはアントワネットと新婚旅行に来ている。結婚式直後に首都スパニッシュ・タウンを出発したと彼に語らせることで、読者にジャマイカという背景を認識させる工夫を施す一方、やってきたのは、「1000キロ以上離れたウィンドワード諸島の小島」にあるアントワネットの母が所有していた地所という設定である。地所への道すがら目にした村の名を、ロチェスターがアントワネットに問う⁴⁷⁾。「虐殺村」とアントワネットが答えたその名は、ドミニカ島の南西部、首都ロゾーの北にあるMassacreで、1672年ドミニカ総督に就任したウィリアム・スタプルトンらによって、先住民カリナゴ人が文字通り虐殺された現存の地名である⁴⁸⁾。

なにより、リースはドミニカ史を理解していたことがわかる。『藻の海』には、黒人からも混血からも憎まれ軽蔑される、当時の白人プランター層の様子が克明に描かれる。1833年の奴隷制廃止から直轄植民地化までの30年間、「英領西インドで唯一、白人支配の弱体化に成功した島」であり、ムラートが白人を経済力で凌駕し政治的にも拮抗していたという近代史である⁴⁹⁾。これはジャマイカでなくドミニカの19世紀であり、そして1920年代のドミニカも似た状況だった。リースは『ジェイン・エア』の枠組みに、故郷の歴史と、遭遇した故郷の「今」を組み込んだのだ。

それゆえアントワネットの自己認識と動揺は、リース自身のそれと共鳴しあう。島の非白人から「白いゴキブリ」と呼ばれ、本国人から「白い土人」と呼ばれるアントワネットは、「では私はいったい何者なのか」と自問する⁵⁰⁾。「父はウェールズ人、母方の曾祖父はスコットランド人」で「わかっている範囲で私は白人だが、母国というものが私にはもうない」⁵¹⁾。リースが59年に編集者へ書き送った回答は、リースのアントワネットへの回答でもある。

『藻の海』第2部で、アントワネットは失くしものをする。亡き母の所領での新婚旅行中、混血の女中と関係した夫に、「あなたは大好きなこの場所を憎むべき場所にしてしまった」と責める。「たとえ何もかもが私から無くなってしまっても、まだここがあるとっていたのに」⁵²⁾。ジュネーヴ農園を失い、反改革の一族と見なされるリースにも、「ここ」はすでに失くした場所だった。第3部のアントワネットは『ジェイン・エア』

の「屋根裏部屋の狂人バーサ」だ。彼女は周囲がどう言おうと、イングランドにいるとは思っていない。「イングランドに行く途中で迷子になったのだ」⁵³⁾。迷子になったクリオール。それは長い奴隷制の歴史の後も続いた植民地支配の、「終わりの始まり」を目の当たりにしたリースにしか描けない、帰属場所をすべて喪失したクリオールの姿だった。

リースの「植民地責任」

高まる運動のなか、1951年ドミニカに成人普通選挙権が付与される。55年には初の政党「ドミニカ労働党」が非白人の圧倒的支持によって結成され、58年の「西インド諸島連合」成立とその瓦解を経て、60年代に入り単独での独立をめざす。そのさなか、61年にリースは、「黒人やカラードや白人の問題について書きたいとは思わない、とても複雑な問題だから」と編集者に綴っている⁵⁴⁾。『藻の海』の成功でようやく貧困から逃れたリースは、1978年「大英帝国勲章」を受け、同年ドミニカはついに独立を果たす。その翌年、リースは89年の生涯を閉じた。

帰郷後の作品や「自叙伝」には、「失った空間を取り戻したいという嫉妬に駆られずには、植民地主義の歴史を直視できない白人の一人」だというリース評があてはまる点も多い⁵⁵⁾。他方で、彼女の宣言とは裏腹に、「黒人やカラードや白人の問題」は多くの作品からほとぼり出てくる。奴隷制と植民地支配に直接手を染めず、その「果実」だけを享受し、やがてそのことすら忘却していた本国の人々に、リースは過去を新たに提示し直した。

多数の目にふれることが前提の、文字に残すという作業過程で、悩み躊躇しながら、嫉妬や動揺など己の醜さを晒すことも自身に課した。それがリースの「植民地責任」だろう。読む者の理解と共有への努力を試す、その目的も含めて。

註

- 1) 浜忠雄『ハイチの栄光と苦難—世界初の黒人共和国の行方』、刀水書房、2007年、143-145頁。
- 2) 堀内真由美『大英帝国の女教師—イギリス女子教育と植民地』白澤社、2008年。
- 3) Howard, J., Watson, K. (eds.), *The White Minority in the Caribbean*, Ian Randle Publishers, 1998, p. 67.
- 4) 本稿では次のテキストを使用。Rhys, J., *Wide Sargasso Sea*, Penguin Books (first published by André Deutsch, 1966), 1984.
- 5) ベルナベ、シャモワゾー、コンフィアン(恒川邦夫訳)『クレオール礼賛』、平凡社、1997年。
- 6) 北原靖明『トリニダード・トバゴ—歴史・社会・文化の考察』、大阪大学出版会、2012年。
- 7) O'Callaghan, E., 'Keynote Address for the Jean Rhys Conference and Festival, Dominica', June 10-13, 2004, p. 8.

- <http://www.cavehill.uwi.edu/bnccde/dominica/conference/rhys/ocallaghan.htm>
- 8) James, S., *The Ladies and the Mammies: Jane Austen & Jean Rhys*, Falling Wall Press, 1983, pp. 90–92.
- 9) Brathwaite, E. K., *Contradictory Omens*, Savacou Working Paper Reprint 1, Mona, Jamaica, 1982, p. 36.
- 10) Savory, E., *Jean Rhys*, Cambridge Univ. Press, 1998, pp. 222–223.
- 11) *Ibid.*, pp. 196–197.
- 12) 本稿では次のテキストを使用。Brontë, C.(introduction & notes by Davies, S.), *Jane Eyre*, Penguin Classics, Penguin Books, 2006、C・ブロンテ（遠藤寿子訳）『ジェイン・エア』上・下、岩波書店、1957年。
- 13) Brontë, *op. cit.*, pp. 351–357、ブロンテ前掲書、下、126–138頁。
- 14) Cundall, F. (ed.), *Lady Nugent's Journal: Jamaica One Hundred Years Ago*, Cambridge Univ. Press, 2010, p. 78, p. 80.
- 15) ウィリアムズ『コロンブスからカストロまで』Ⅰ・Ⅱ（川北稔訳）、岩波書店、1978年、Ⅱ／5頁。
- 16) Rhys, J.(selected by Wyndham, F. & Melly, D.), *Letters 1931–1966*, Penguin Books, 1984, p. 213.
- 17) *Ibid.*, pp. 261–262.
- 18) *Ibid.*, pp. 270–271.
- 19) Rhys, *Wide Sargasso Sea*, pp. 120–121.
- 20) Brontë, *op. cit.*, pp. 358–359、ブロンテ前掲書、下、138–139頁。
- 21) ドミニカの歴史に関しては次の資料を引用・参照。Honychurch, L., *The Dominica Story: A History of the Island*, Macmillan, 1995 (first edition 1975).
- 22) リースの生涯に関しては次の資料を引用・参照。Angier, C., *Jean Rhys: Life and Work*, Little, Brown and Company, 1990.
- 23) *Ibid.*, pp. 13–14.
- 24) Rhys, J., *Smile Please: An Unfinished Autobiography*, Penguin Books (first published by André Deutsch, 1979), 1981, pp. 104–105.
- 25) Rhys, J., *The Left Bank and Other Stories*, Cape, 1927.
- 26) Rhys, J., 'Again the Antilles', in *The Collected Short Stories*, Norton, 1987, pp. 39–41.
- 27) Rhys, J., *Voyage in the Dark*, Penguin Books (first published by Constable, 1934), 2000, pp. 45–47.
- 28) *Ibid.*, pp. 56–57.
- 29) ストラー（永渕・水谷・吉田訳）『肉体の知識と帝国の権力』、以文社、2010年、83–84頁。
- 30) Honychurch, *op. cit.*, pp. 127–132.
- 31) *Ibid.*, pp. 148–150.
- 32) Rhys, *Letters 1931–1966*, pp. 28–29.
- 33) Honychurch, *op. cit.*, p. 158, Angier, *op. cit.*, p. 354.
- 34) Vreeland, E., 'Jean Rhys: The Art of Fiction LXIV', in *Paris Review*, Fall, 1979, p. 228.
- 35) Rhys, *Smile Please*, pp. 37–38.
- 36) Angier, *op. cit.*, p. 8.
- 37) Honychurch, *op. cit.*, pp. 162–163.
- 38) Rhys, *op. cit.*, pp. 63–64.
- 39) Rhys, J., 'The Day They Burned the Books', in *London Magazine*, 7 July, 1960, pp. 42–46.
- 40) Rhys, J., 'The Day They Burned the Books', in *The Collected Short Stories*, Norton, 1987, pp. 37–43.
- 41) Rhys, *Smile Please*, p. 49.
- 42) Honychurch, *op. cit.*, pp. 165–166.
- 43) Howard, J., Watson, K.(eds.), *op. cit.*, p. 64, Rhys, *Smile Please*, p. 49.
- 44) Rhys, *Letters 1931–1966*, p. 105.
- 45) *Ibid.*, pp. 276–277.
- 46) Honychurch, L., 'Geneva Estate at Grand Bay', <http://www.lennoxhonychurch.com/jeanrhysbil.cfm>
- 47) Rhys, *Wide Sargasso Sea*, p. 55.
- 48) Honychurch, *The Dominica Story*, p. 45.
- 49) *Ibid.*, p. 128.
- 50) Rhys, *op. cit.*, p. 85.
- 51) Rhys, *Letters 1931–1966*, p. 172.
- 52) Rhys, *Wide Sargasso Sea*, p. 121.
- 53) *Ibid.*, p. 148.
- 54) Rhys, *Letters 1931–1966*, p. 202.
- 55) Savory, *op. cit.*, p. 193.

(2013年9月17日受理)